

次世代建築、都市づくりを考える



野澤 康氏
工学院大学建築学部学部長
建築学部まちづくり学科教授



長澤 泰氏
工学院大学特任教授・共生工学
研究センター長・東京大学名誉教授



飯田 修一氏
株式会社現代建築研究所
代表取締役社長

■Society5.0が
生み出す建築、まちづくり

飯田 いま、世界レベルで社会が大きく変わってきています。情報化社会が一段と進み、新しいデジタル社会といったものに変化しています。狩猟社会

てい談

1949年12月9日に、故・北代禮一郎により創設された株式会社現代建築研究所が、2019年12月に創立70周年を迎えた。クラウンの満足を追求する姿勢を貫き、多くの建築作品を通して、社会に貢献してきた同社は、近年では医療施設を中心に、教育施設やホテルなど数多くの作品を創出するまでに、これまで培った専門的な知識とノウハウを生かして、ワンランク上の地域医療福祉施設を実現する医療福祉施設コンサルティングやまちづくりなどで先駆的な活動を展開している。創立70周年を機に近年の作品を紹介する。 「技術と感性、ITと環境の融合による次世代建築、都市づくりのあり方」をテーマに、飯田修一社長と工学院大学特任教授・共生工学研究センター長・東京大学名誉教授の長澤泰氏、工学院大学建築学部学部長・建築学部まちづくり学科教授の野澤康氏と対談してもらった。

農耕社会、工業社会、情報社会に続く、5番目の新たな社会「Society 5.0」です。AI、IoT、ビッグデータ、ロボットなど全く新たな技術革新が、世の中の変化と運動しています。Society5.0は、IoTとかが物がつながり、情報が実社会の中で、血液のように流れ、気のように充滿し、リアルな世界がどんどん変わっていきます。

少子高齢化、人口減少が進む中で、新しいデジタル社会とまちや空間・建築をどうにすればより豊か元気のある未来をつくれるかというご心配があります。Society5.0は、まちづくり、建築、そして長澤先生がご専門のヘルスケアと密接につながっています。

これまでは、病院建築という大きなテーマがあり、施設の機能性や快適性を研究されてきました。一方、都市計画の分野では、既存の都市のあり方の研究や、大きなまちづくりのビジョンをめぐり、大都市やニュータウンを開発してきました。これからは、ヘルスケアのあり方が変わり、まち全体で病院の機能を担っていくようになります。

まずは、そのお話しを長澤先生から伺えればと思います。

野澤 わたしは、30年ほど前に「もう『病院』は要らない」と主張し始めました。単に「病人」が行く場所ではなく、そこに行けばみんな健康になるのが本来の「病院」の姿です。「病院でなく健康」つまりこれからは「健康」にしたいなと思ったのです。当初はなかなか受け入れてもらえませんでした。いまは医師側からも健康を知っていますかと言われるほど考え方が変わってきました。今後は、IoT、ICTによって、病院のあり方も大きく変わってきます。家庭で尿や血液なども簡単に採れる時代が来ます。検体を送れば、検査結果データがスマートフォンに返ってくるようになるでしょう。以前は患者中心の発想が大事でしたが、最近では医師や看護師、事務職員などスタッフが働きやすい施設環境をつくることで、結果的に患者のためになるという発想に変わっています。もう少し先には、まちの中に病院の機能が分散していくのではないかと考えています。

野澤 過度に情報化が進むと、人は家から出なくなる可能性があります。居ながらにしていろいろなものが配達されてくる時代。購買行動が大きく変化し、小売店が成り立たなくなっていく。さらに、それが進んだ時にまちの中心や人が集まる場所がどう変わるかを考える必要があります。「健康」は、その1つがもしもありません。そうした施設がまちの中に点在し、その間に公園のようなものがあるイメージです。いままでの商店街などを中心とした中心市街地のあり方から脱却して、まちが変わる際には、そうした考え方もあり得ると思います。

また、家から出なくても暮らせるような時代だからこそ、まちに出てきてもらうような新たな魅力づくりを考える必要があります。「歩けなくなっても出てこられるまち」が究極です。歩けなくなっても外出できるには、パー

飯田氏 物理的な建築だけでなく気持ち良い空間をつくる

ソナルモビリティなどの移動手段を考えたときにはいけません。それも、お年寄りでも扱えるように自動運転のものが必要です。今後、時代が大きく変わり、そうした社会が20年、30年後にやってくるでしょう。

飯田 国土交通省の立地適正化計画は、いままでのように鉄道を中心とした駅前のコンパクトシティから、コンパクト&ネットワーク型に変わってきています。新しい交通手段によってハブが生まれ、ネットワーク化によって衛星みたいなような駅前よりも、大型ショッピングモールに人が集まるような地方都市が多くなります。

長澤 ショッピングモールは、買い物だけでなく、いろいろな催し物を集め、健康的で日常的な場所になってきています。

飯田 物を売受ける空間から、機能性や利便性を考えてもっと充実させ、楽しくてワクワクするような場所にする。お祭りやイベントや出合いの場などがあるのも、もっと変わっていく。買い物は届けてもらう時代になるとモビリティ空間に空気が生まれる。そこを再開発して、まちの中でいい場所にしていかないといけません。

長澤 10年前に米国でショッピングセンターに行った。CT検査センターがあったのは驚きました。クリニックにはありません。買い物棚に撮ったCTデータを主治医に送るので、わざわざ病院に行かなくて済みます。飯田 あるネット通販のリアルショップでは、本屋に本が1冊ずつしかない。図書館のように本を見られるが、その場では買えない。いと思ったならスマートフォンで注文すると、後自宅に届く。そうしたショールーム的なものは、大型家電量販店なども同様です。実物を見てその場で買わず、帰宅後にインターネットで注文する。商業のあり方も大きく変わってきています。そうした中で、人が集まったり、実際に触れたりすることがより大事になってくる。ゲームオタクがイベント会場に何万人、何十万人と集まることと同じです。

長澤氏 自然を生かすような都市、環境デザインが必要

■新たな共生の試み

長澤 まちづくりについての最近の話題はどのようなものですか。

野澤 先ほど飯田社長が立地適正化計画の話でしたが、いま立地適正化計画の全国調査を進めています。そこ興味深いのは、居住誘導区域から外れる区域です。将来の人が住まなくなる場所をどうするか。

例えば、50年、100年先には自然に戻すという。そう簡単ではありません。日本では、郊外ならではの優雅な暮らしや住みやすい環境があまりありません。これからは、真の郊外生活や田園生活ができるまちづくりも必要です。

長澤 小鳥のさえずりやせせらぎなど自然の音を人工的な環境の中に流す。人は落ち着くそうです。商談も進むといわれています。人が本来持っている自然環境への親しみを生活の中に生かす。

飯田 物を受受ける空間から、機能性や利便性を考えてもっと充実させ、楽しくてワクワクするような場所にする。お祭りやイベントや出合いの場などがあるのも、もっと変わっていく。買い物は届けてもらう時代になるとモビリティ空間に空気が生まれる。そこを再開発して、まちの中でいい場所にしていかないといけません。

長澤 10年前に米国でショッピングセンターに行った。CT検査センターがあったのは驚きました。クリニックにはありません。買い物棚に撮ったCTデータを主治医に送るので、わざわざ病院に行かなくて済みます。飯田 あるネット通販のリアルショップでは、本屋に本が1冊ずつしかない。図書館のように本を見られるが、その場では買えない。いと思ったならスマートフォンで注文すると、後自宅に届く。そうしたショールーム的なものは、大型家電量販店なども同様です。実物を見てその場で買わず、帰宅後にインターネットで注文する。商業のあり方も大きく変わってきています。そうした中で、人が集まったり、実際に触れたりすることがより大事になってくる。ゲームオタクがイベント会場に何万人、何十万人と集まることと同じです。



野澤氏 究極は歩けなくなっても出てこられるまち

■新しい時代の人材育成

長澤 工学院大学は昨年、「共生工学研究センター」を発足しました。工学に関する幅広い領域を専門分野として持つ大学の利点を生かし、いち早く「シロテクノロジー」に関する研究開発を推進して、超高齢社会が直面するさまざまな課題を解決することにも、学部・学科横断型教育を通して異分野の専門家と連携して多様な課題に挑戦できる能力を持つ人材を育成します。言わねば、Society5.0を支える研究・教育です。

また、工学院大学は日本で初めて建築学部をつくりました。初代学部長はわたたくし、2代目は野澤先生が務めています。

野澤 建築学部をつくる時に「インテリアからランドスケープまで」というように領域を広げました。いままでは、そうした取り組みが、だいたい社会に浸透してきたかと思っています。建築のあり方がどんどん変わってきている中で、教育は本当に難しいこと。そうした中で、設計とか技術的なことをきちんと勉強した上で、いろいろなことを考え、発想できる人材を育成していきます。そうした人を社会に出していきたいと思っています。

長澤 工学院大学は昨年、「共生工学研究センター」を発足しました。工学に関する幅広い領域を専門分野として持つ大学の利点を生かし、いち早く「シロテクノロジー」に関する研究開発を推進して、超高齢社会が直面するさまざまな課題を解決することにも、学部・学科横断型教育を通して異分野の専門家と連携して多様な課題に挑戦できる能力を持つ人材を育成します。言わねば、Society5.0を支える研究・教育です。

また、工学院大学は日本で初めて建築学部をつくりました。初代学部長はわたたくし、2代目は野澤先生が務めています。

野澤 建築学部をつくる時に「インテリアからランドスケープまで」というように領域を広げました。いままでは、そうした取り組みが、だいたい社会に浸透してきたかと思っています。建築のあり方がどんどん変わってきている中で、教育は本当に難しいこと。そうした中で、設計とか技術的なことをきちんと勉強した上で、いろいろなことを考え、発想できる人材を育成していきます。そうした人を社会に出していきたいと思っています。

ゲリラ豪雨対策に!
建物内・地下街への水の浸入を阻止

押ボタンスイッチで簡単操作 浸水高さ3mまで対応
開口幅7.5mを簡単止水 管理用シャッターとして使用可能

NEW アクアフラット
止水パネルシャッター

文化シャッター株式会社
〒113-8535 東京都文京区西片1丁目17-3 ☎0570-666-670

窓から夢をひろげていきます
不二サッシ

<http://www.fujisash.co.jp/>

技術で、未来に挑戦
地球環境に優しく、子供たちの未来のために
「技術の東熱」は挑戦を続けよう。

東熱
技術者、人と地球のために
〒104-8324 東京都中央区京橋二丁目5番12号
東洋熱工業株式会社 TEL:03-6250-4112 www.tonets.co.jp

SANKEN ENVIRONMENTAL ENGINEERING
人と環境創造
空気と水の環境創造

求められる環境を、望まれたカタチにする。
三建設備工業は豊富な実績と確かなノウハウで常に最適な環境を創り出します。
空気と水、そして、人...この技術で「全て」のために。

空気と水の環境創造企業
三建設備工業 <http://skk.jp/>